

孔雀夫人 (1936)

DODSWORTH

メディア 映画

ジャンル ドラマ ロマン스

製作国 アメリカ

色彩 B&W

時間 101分

初公開日 1937/11

公開情報 劇場公開

【解説】

ダズワース自動車工場の社長サム（ヒューストン）は手塩にかけた会社を大手に売却し、妻フラン（チャタートン）のため欧州一周旅行に出る。仕事一筋の彼は満足に彼女をハネムーンに連れていってもやらなかった。が、まだ30代後半と若いフランは派手好みで、船がロンドンに着こうとし、町のサーチライトに興奮するサムを尻目に、船内で知り合った英国紳士のロカート（ニーヴン）といちゃついている。彼は婦人に迫ってフラれると侮辱的な言葉を吐いて消える。フランはロンドンでは町を歩けないと言い、そのまま二人はパリに向かった。当地の上流のつきあいにすっかり魅了されたフランは、観光に退屈した夫をさしおいて、そこに居つくことに。初めは中年実業家のアイスリン（ルーカス）と深い仲になったフランは、欧州各地を回って帰った夫に諫められるが、若き男爵の息子クルトとウィーンに行ってしまうとは、夫の堪忍袋の緒も切れる。彼は船上で親しくなったイデイス（アスター）と、彼女の住むナポリで再会し、その屋敷にしばらく滞在。釣りをしたり帆船にエンジンを積んだりしてのんびり過ごす。知的で洗練されたイデイスへの想いは次第に募り、妻との離婚も決意するサムだが、クルトの母の男爵夫人に拒まれて復縁を望むフランに、永年連れ添った責任があるからと、イデイスには別れを告げて、妻と共に帰国の船に。が、そこでも他人の悪口しか言わないフランにさすがにうんざりし、彼は出航間際、とっさに下船し、イデイスの待つナポリへ向かった…。ベストセラー女流作家シンクレア・ルイスの原作に基く、辛辣な熟年の愛を描く映画で、ヒューストンがアメリカ男の真っすぐさ、けじめ深さを真にうまく表現して水際立つ。女優陣も大変達者で、ワイラーの演出も手堅い。夫からの手紙をアイスリンがフランの前で燃やす場面で、火のついた手紙が風に舞うさまが美しく印象的。

【クレジット】

| | | |
|----|---------------|-------------------|
| 監督 | ウィリアム・ワイラー | William Wyler |
| 製作 | サミュエル・ゴールドウィン | Samuel Goldwyn |
| 原作 | シンクレア・ルイス | Sinclair Lewis |
| 脚本 | シドニー・ハワード | Sidney Howard |
| 撮影 | ルドルフ・マテ | Rudolph Mate |
| 音楽 | アルフレッド・ニューマン | Alfred Newman |
| 出演 | ウォルター・ヒューストン | Walter Huston |
| | ルース・チャタートン | Ruth Chatterton |
| | ポール・ルーカス | Paul Lukas |
| | メアリー・アスター | Mary Astor |
| | デヴィッド・ニーヴン | David Niven |
| | グレゴリー・ゲイ | Gregory Gaye |
| | マリア・オースペンスカヤ | Maria Ouspenskaya |
| | スプリング・バイントン | Spring Byington |

